

な風な記事も書いてみたいと試作してみた。

松沢常夫

失対事業の五十五年再検討が公式に開始される来年四月まであと一年。失対事業にトドメを刺されるか、再確立の道へ進めるか、すべては、この一年間のたたかいにかかっています。①失対事業の民主的改革（民革）、②失業者闘争、③合意・賛同、④共闘、の四目標のなかでも、民革が基本です。五月八日、九日の第88回中央委員会で、中西委員長は幹部がハラをきめ、全国のなかま一人ひとりが、民革にとりくむよう、強く強く訴えました。この中西委員長の決意にこたえてください。

『戦闘服』で試案提案

この日、中西委員長は『戦闘服』で議案提案に立ちました。袖をまくりあげた、うす茶のジャンバー姿。なみいる中央委員と大げんかしても、どうしてもやりぬかねば、という気迫がほとばしり、近づくのも恐ろしくらいです。

「民革ぬきでは失対再確立はありません。このままでは失対は終りになってしまいます。その大きな試練、五十五年再検討に対決するためにも、民革の重要性を徹底的に討論すれば、仲間は理解してくれるという確信が幹部に欠けています。『なるようにしかならぬ』『何とかなるだろう』という気分はルンペ恩の思想です。民革によって、失対事業を町のために役立てることを事実ないことがたくさんあつた。一般的な会議報道とあわせて、こん

まえがき

人間は変わるんだ 労働者はたたかうんだ

—全日自労の中央委員会から—

で示せば、國と町の世論を大きく変えることはできます。幹部が身体をはつた指導が必要なのです。」

一節をよみおわると、太い黒ぶちのメガネをはずして、かんでもくめるように補足説明に入りました。

「民革は、非常に大事なもんだと思うんです。四目標の中でも基本的なものです。とにかく民革をやれば、その支部・分会は生まれかわります。確信にみちてきます。しかも、一步一歩変革をしていこうという労働者に発展していきます。なんとかうまいことしてごまかしてやろうつな労働者では、意味がありません。民革は、人をえていく、大きな思想変革の運動なんです。自分の生活をよくすると同時に、町をかえ、世の中をかえていくためにがんばる労働者をつくるんです。これは日本の労働運動をかえていくほどの重要な意味をもつてゐるんです。」

一語一語に力がこもり、いつしか、いどむような調子にかわっていきます。

“心がこもっていいない”

委員長は、昼休みも、喫茶店に入ると、いつもなら店員が水をもつて注文をききにくるのを待つのに、カウンターの方へ歩いていって、「アメリカン」と注文。

こんどは私に向つて「“じかたび”は、どうも思うようなものにならんな、『これを訴えたいんだ』という、わきあがるようなもの、それが、君らにはないんだ」と、険らひつじてきます。

“やる気のない幹部はやめろ”

午後、中西委員長は、本当に仲間を守りぬく姿勢に幹部は立つ

てほしく、という思ひをこめて、きつと言葉もつかいました。

「やる気のない幹部は代わつてもらひ。仲間に責任がもてない。そこまで身体をはつて、やるかやらないかです。少々仲間から突きあげがあつても、民革をやつたら、必ず自信がでります。やる気がないところは言つて下さい。のりこんで対策をねります。やるようなかつこうをしてやらんのが一番悪いんです。」

各中央委員も卒直な発言で応えます。三重県支部の山田委員長は「中西さんの出身の松坂以外は、民革がすすまない。東海地協の会議でも、『民革なんて無理』という意見がでても、そつか、とこうことでスッと通つてしまふ」と、実情をバクロ。全国市長会失対都市協会長都市、いわき市での民革の重要性から、名差しされた福島県支部松寺委員長も「県支部では実権派だが、分会はどうも。少し時間をかしてほしく」と、冷や汗たらたらで、苦しそうなところを口にしました。

“中執はやる気があるのか”

逆に、本部へも「中央委員会前になると、あつちの書記、こつちの書記と、点検の電話がくる。いつもは、なんにもつかんでいいといつて、『じかたび』は、どうも思うようなもの長くらじのやる氣があるのか。中執出身県で、一つも合意がとれていなかつところが三つある。真剣さがたりない」（兵庫・和田）など、できひしい批判がされました。

中西委員長は再び立て「三重ですが、そうですね。ほかの分会はダメですね」と笑わせ、「県支部委員長は分会に入つて、目

つくり玉に手えつづ込むような指導はできないんですね。私が支部委員長のときも、ケンカ、ケンカでやりましたけど、分会を動かす権限はないんですね。だから、すべてがそうだというわけじゃありませんけれど、仲間のなかにある、らくして、うだうだしで、なんとかすぎていこうと、いう気持に迎合しようとする思想が、幹部にあるんです。そういう仲間の気持を変えたら、自分もハダ力になつてやらなきやならない。そんなエライことはかなわん、という考え方です。だから、ケンカ覚悟でやつてもらわななりません。なぐりあいになるかもわからんが、いざれにせよ、たたかわなければしょうがないんです。わしがようやらなんだ問題ですから、山田委員長も大変だと思いますが、全力をあげて下さい。」「和田さんからは、しんらつな問題が提起されました。本部がやがましく言うと、反作用でみんなからも、きびしく言われる。これを切磋琢磨というんでしよう。中執の一人ひとりに“あんたやる気ありますか”なんて、聞いたこともないんですけど、信頼します。いざれにしろ、支部・分会にやる気になつてもらうのは本部の指導責任です。目の玉に手をつつこむような指導・点検をやります。民革は、九月には事業計画が変更できるよう、八月までの第一期闘争期間をとりこんで下さい。」
あらゆる非難も責任も受けて立つ氣構えが、はつきり見てとられます。この日は、“どうせいつもの通り、六時ころには終るだろう”といふ大方の願望を裏切つて、予定どおり八時半までつづきました。

民革は再確立の前提が

翌日は、和田中央委員との間に、民革を、再確立闘争のなかで、どう位置づけるかについて論争になりました。

和田中央委員は「民革は87中委で明らかにされたように、民済やありませんけれど、仲間のなかにある、らくして、うだうだしで、なんとかすぎていこうと、いう気持に迎合しようとする思想が、幹部にあるんです。そういう仲間の気持を変えたら、自分もハダ力をになつてやらなきやならない。そんなエライことはかなわん、全体を歪少化してしまう。」と強調しました。

中西委員長は、まとめの中で「いすれ、じっくり議論しよう」と前おきしたうえで、「民革の深い内容を追求することは大事です。しかし、現実に失対事業はダラダラしている、という批判があります。強くあるとき、失対事業が実際に町のために役立つよう、一步一歩変えていく過程を度外視しては、失対再確立はありません。」と反論しました。

本当に信頼するとは

中央委員会は不十分な点や議論の足りない点がたくさんあります。中西委員長の話をきいてみると、ほんとうにこの人は、身体を張つているな、仲間を信頼しているな、と思えます。仲間の何を信頼するのか。仲間のどこが信頼に値するのか。中西委員長は、非難したルンペンであろうが、だれであろうが、人間なら、労働と闘争の中で一步一步めざめていくものだ、という確信をもつています。だから“どうでもなれ”と思つている人間を、追つかけてでも変革しないではいられない執念をもつています。そこに、人間解放の深い思想をはつきりと見ることができます。